

沖縄県久米島具志川村における海外出移民 (特に中南米移民)の特性について

西川, 大二郎

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

63

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

89

(発行年 / Year)

1987-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005276>

沖縄県久米島具志川村における海外出移民 —特に中南米移民—の特性について

西 川 大二郎

1. はじめに—問題の設定と所在—

本報告は、沖縄県久米島具志川村における第2次世界大戦前における海外出移民の社会的経済的出身階層とその行動様式の分析をとおして、第2次世界大戦前における日本の海外移民の社会経済的特性の一部を明らかにすることを目的としている。

上記の目的にしたがった具志川村の調査は、具体的には、まず、法政大学久米島総合調査に参加した際に始められた。その結果は、「久米島の海外出移民の社会経済的特性」(『沖縄久米島の総合的研究』弘文堂、1984年、pp. 57～90)として、すでに発表した。

まず、日本の海外出移民の問題は次の三点に整理することができよう。それは、1. 移民が析出されてくる社会経済的背景の問題、2. 「移民」に対するイメージの時代的变化の問題、3. 移住先における移住者ないし移住者集団の状況、つまり移住先社会に対する適応(非適応をも含む)の問題およびそこにおける様々な集団と意識の形成の問題である。上記の調査においては、特に第一の問題に焦点を当てた。

第一の問題について見ると、日本の明治以降の出移民の社会経済的条件は、日本の資本主義の発展と関わらせて、開国、農民層の分解、貧困層の創出、過剰人口(はみだし者)、移民という理解があるが、移民現象は、それほど単純なものとは考えられないし、またこのような単純な理解は、移民に対して一方的に暗いイメージを創り上げる役割をも果たしている。(例えば、文学作品であるが、石川達三『蒼氓』に代表される移民像) われわれとしては、日本の明治以降の出移民現象を、日本の資本主義の発

展と関わらせて性急に一般化するのではなく、時代的、地域的狀況に即した具体的事実から改めて出移民現象を考察する立場に立っている。前回の調査の結果、久米島の中南米方面への出移民の出身階層は、一般に指摘されているように貧困層からのものでなく、どちらかという上層に属するものであることが推定された。

しかし、久米島には移民關係の公的に整理された資料はなく、したがって、前回の調査においては、まず現地における役場の旧戸籍から出移民者の名前を渉獵し、さらに關係者からの聞取りによってそれを補強しながら、調査のための最も基礎になる移住者の名簿作成という作業から始めなければならなかった。その上、調査期間の制約もあり、対象地域を、久米島内の2村（仲里村・具志川村）の中の後者、さらに具志川村内14部落（字）のなかで仲村渠・具志川・仲地・山里の4部落（字）に限定して、調査を行なわざるをえなかった。したがって、上記の結論を導くには、実証する資料が充分だったとは思えない。

今回の調査は、基本的には、その方法を同じくしている。ただし、対象地域を具志川村内の14の字のすべてに拡大した。

また、久米島においては入手できなかった（具志川村の人々は誰も手元に持っていなかった）『具志川尋常高等小学校50周年記念誌』昭和9年発行を、かつてペルーに移住し、引揚げて現在沖繩本島に居住している人とインタビューした際に、見ることができた。そして、その資料のコピーを入手することができた。（島内居住者の場合、公的機関を含めてこの記念誌を保存していなかったということは、それ自体一つの問題として取上げることができよう）。この資料の中には、当時の時点において、卒業生の活動狀況として卒業生の名簿が掲載されている。それによると、前調査で知れた男子成人として50名弱のハワイ・ペルー・ブラジル移住者に加えて、さらに30名弱の成人男子移住者名が明らかになった。

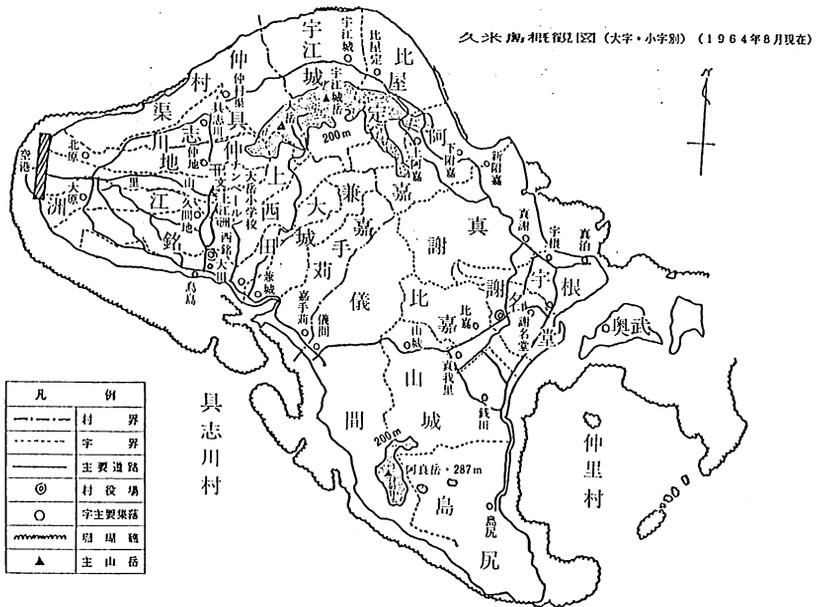
これに加えて、旧土地名寄台帳の閲覽、村内および村外在住の移住關係者とのインタビューの追加、現大岳小学校（旧具志川尋常高等小学校）およびチンペー（島の神社）への在外者による寄付行為についての幾分の資料の収集などを行なうことができた。

2. 久米島の出移民の歴史的・地域的特性

(1) 久米島の概観

久米島は、沖縄本島那覇の西方約100キロメートルにあり、周囲約48キロメートル、面積約62平方キロメートルの島である。現在は、久米島フェリーが那覇からの定期航路（約2時間半）を持ち、また南西航空が定期便（飛行時間25分）を飛ばしている。行政的には、島の東半を占める仲里村と西半を占める具志川村の二村から成る。

仲里村は、人口5,365人（昭和50年国勢調査）、字江城、比屋定、上阿嘉、下阿嘉、真謝、宇根、真泊、泊、西奥武（西オー）、東オー、謝名堂、比嘉、真我里、銭田、島尻、山城、儀間の17字（部落）から成り、具志川村は、人口4,744人（同前国勢調査）、仲村渠、具志川、仲地、山里、上江洲、西銘、久間地、北原、大原、鳥島、仲泊、大田、兼城、嘉手苺の14字（部落）から成る。（第1図）



第1図 久米島概観図(大字・小字別) (1964年8月現在)

第1表 「沖縄県の具志川村民，仲里村民の，外国，植民地，
県外在住者調（昭和10年12月末現在）」より，

村	渡航先 アメリカ・ハワイ	商 米			フィリピン	その他外国	外国 在住者小計	商 洋	台 湾	そ の 他 県 外
		ペ ル ー	アル ゼン チン	ブラ ジル						
具志川村	9	76	—	60	11	6	162	130	95	282
仲里村	1	20	—	15	—	20	56	99	37	230

資料：『沖縄県史，7，移民』1974年，第14表，第21表，第22表より作成。

第2表 第2次世界大戦前における具志川村民および仲里村民
の海外活動者の地域別状況

村	渡航先 アメリカ・ハワイ	商 米			シンガポール	フィリピン	商 洋	台 湾	朝 鮮	樺 太	中 国・ 満 州	そ の 他	合 計
		ペ ル ー	アル ゼン チン	ブラ ジル									
具志川村	5	110	2	59	—	14	260	96	11	5	9	1	572
仲里村	1	11	—	6	18	3	240	52	13	—	1	—	345

資料：具志川村および仲里村役場資料（調査資料を加工）鳴沢巖「移民動向からみた島島」『沖縄久米島の総合研究』弘文堂，1984年所収。

(2) 出移民村としての仲里村と具志川村

この両者を出移民の村として見た場合，出移民の数は，後者が前者を著しく上回っている。回帰性の強い出稼ぎ移民の場合，それを統計的に押えるのは幾分の困難さがあるが，いくつかの資料が，大すじの傾向を表現している。

第1表は，昭和10年末における県庁統計による在外者数であるが，単なる県外在住者においては，仲里村と具志川村とでは，前者の230人に対して後者は282人と両者の間に大きな差異が認められないが，当時の外地である台湾，南洋庁については，136人対225人，北米・中南米など外国については，59人対162人と大きな懸隔が見られる。（第1表）

第2表は、第2次世界大戦前における海外活動者の傾向を、鴨沢が戸籍再生資料から推定し作成したものであるが、外地および外国在住者については、同様の傾向が見られる。そこで、出移民の質的内容に迫るために、量的に多い後者の具志川村に焦点を絞る。(第2表)

(3) 第2次世界大戦前の具志川村移民の歴史的傾向

具志川村における出移民の歴史的傾向については、既に前回の調査報告に示した。その中で、第2次世界大戦前における具志川村の出移民を歴史的に、1. 明治末期(明治39年)以降大正初期までのハワイ・中南米向けの少数の「先覚者」型のもと、2. 大正中期以降昭和初期までの出移民の増大期のもとに分類した。

第1期の出移民の社会経済的条件は、明治32年に公布、施行された「沖縄土地整理法」(具体的な土地整理が具志川村で行なわれたのは明治34年)と、それに引続いて明治36年に公布、37年に施行された「地租条例及び国税徴収法」を通じて行われた一連の近代的土地所有制度の展開と考えることができる。つまり、「間切」を単位とした、具体的には「地割替」(「土地割替制」)によって表現される「村落共同体」的土地保有形態から、個人的土地所有を基礎とする近代的土地所有への転換がある。その過程で地租は金納化されたが、それまで「間切」を単位としていた滞納国税が個人の責任に転化されるようになった。(この滞納国税問題の打開策として、明治36～37年の鳥島からの移住者の受け入れが、島経済の一時的活性化に意味を持ったことは、前記鴨沢論文参照)。また、商品経済は進行し、土地の売買、譲渡、質入れが自由となり、そのことが、「大地持ち」と「貧農」の落差を生み出すと同時に、村民の「間切制度」からの自由を伴いながら、島民の他地域への移動の自由を許すようになった。そのような状況に加えて、明治37年の70年振りといわれた大干害も大きな契機となって、村の上層部の個人による「先覚者」型の海外出移民の行動を生んだと考えることができる。

第2期、つまり大正中期以降の出移民の増大期の出移民の社会経済的条件は、第1の時期に準備された条件の下で、より一層の商品経済の進展が、具体的には、この島の主産業となった砂糖きび生産によるモノカルチャー化の拡大として現われ、大正7年までの黒糖の相場の上昇に支えられた砂糖きび生産の好況、それに続いた大正9年の後半に現れた黒糖相場の急落

による不況が、大正末期以後島の農村に貧困と過剰人口問題を深刻化させ、それが、第2の時期の人口流出の基本的条件となったと考えられる。しかし、人口流出現象は、具体的には、村内における職種、社会経済的階層によって現れ方を異にするのは、当然のことである。

以上のような文脈の下に、具志川村の海外出移民、特に第2期中南米移民を中心にして、新しく見付けられた資料を用い、また、前回の調査と異って、調査対象を具志川村の各字にまで拡大して、その特性分析を進めることにする。

(4) 移民資料としての『具志川尋常高等小学校50周年記念誌』について
具志川村の出移民に関する乏しい資料のなかで、昭和初期の状況を知ることができる資料として、『具志川尋常高等小学校50周年記念誌』（昭和9年）は、極めて貴重なものの一つであると考えられるので、これについて若干述べておく。

現在、具志川村には、大岳、清水の2小学校と具志川中学校とがあり、仲里村と合せて島内に久米島高等学校を持つ。その中で最も古い歴史を持つのが、大岳小学校であり、その前身が具志川尋常高等小学校である。

大岳小学校の沿革の大要は、次のようなものである。

- 明治15年、7月15日認可を得て字西銘屋号学校屋敷というところに23坪の掘立小屋茅葺建築で、西銘小学校と称した。
- 明治21年、字西銘手加門に敷地変更、西銘尋常小学校と改名。この年、那覇からの大原開墾移住があった。
- 明治22年、仲城簡易小学校分立（具志川間切の仲村渠、具志川、仲里間切の字江城、比屋定で）。
- 明治24年、初めて女兒の入学があったが、一般に非難せられ半途退学した。
- 明治27年、日清戦争（8月）。
- 明治28年、日清戦争（3月）終む。仲城小学校復帰する。
- 明治29年、女兒7名入学。儀間（現仲里村）に久米島高等小学校新設。
- 明治31年、徴兵令実施。
- 明治35年、4月1日具志川尋常小学校と改称。現敷地（山里）に校舎移転。
- 明治37年、前年12月20日と当年2月11日と2回の島島移住によりその

童 112 人本校編入。日露戦争勃発（2月8日）。

- 明治38年，日露講和（9月）。11月志賀重昂代議士来島巡察。
- 明治39年，2年制高等小学校が新設され具志川村尋常高等小学校と改称。
- 明治41年，義務教育6ヶ年となり，2ヶ年制高等小学校が5，6年となり，具志川尋常高等小学校と改称する。
- 大正5年，高等科併置。
- 大正13年，女子実業補習学校併置。
- 昭和4年，女子実業補習学校廃止。
- 昭和7年，7月15日，創立50周年記念式典を挙行。
- 昭和12年，7月7日支那事変突発。
- 昭和16年，4月1日具志川村国民学校と改称。12月8日太平洋戦争起る。
- 昭和19年，10月10日那覇空襲以来警報令中は休業。
- 昭和20年，3月23日沖繩戦始まる。4月30日空襲により校舎焼失。6月26日米軍仲里村銭田に上陸。6月3日頃米軍本校に駐屯し残存校舎破壊，校具，重要書類散逸。8月15日終戦。10月25日各字に分教場を置き開校。
- 昭和21年，大岳初等学校と改称す。
- 昭和23年，大岳小学校。学制改革により7年，8年は具志川中等学校に編入。
- 昭和27年，4月1日琉球政府発足。
- 昭和42年，5月15日祖国復帰。

したがって，本校は，明治15年（1882年）に創立され，既に100年の歴史を有している。昭和7年（1932年）に50周年記念式典を行ない，その際，編集したのが，前記の72ページにわたる記念誌である。その内容は，当時の教職員の写真，はしがき，校訓，教育方針，校歌，記念式次第，祝辞，祝詞，謝辞等，村長所感，校長回顧，教育功労者氏名，学校沿革大要，創立以来の主座訓導並校長氏名，昭和8年の教員配置表，具志川学区域学事（教育）普及状況，児童の作文集の外，簡単な村勢要覧と郷土民謡集が付されている。それに加えて，卒業生の活動状況と創立50周年寄付者芳名が，個人名によって記されている。

この資料は，戦時における校舎の焼失，米軍の駐屯による重要書類の散逸もあって，学内になく，1982年の100周年記念事業に際して，記念誌編集関係者が村内有志に呼びかけていたにもかかわらず，村内の誰からも提

供を受けることができなかった。先にも述べたことであるが、私が移住関係者を訪ね歩いている間、ペルーから帰国して現在沖縄本島に居住していた人（仲村昌全氏）が持っていることを、たまたま知り、その人によって、その内容を知り、コピーを取ることができたものである。その人は、昭和初期から戦後まで20年間に亘るペルーでの生活の間これを携えていたものであろう、表紙は破損し、中のページも30～33ページ、37～46ページ（児童の作文の部分）および70ページ以下が脱落していた。このコピーは、具志川村の大岳小学校100周年記念誌編集関係者に届けたが、後にその人にお会いした時、もう一冊破損の少ないものを別途、といってもやはり現在ペルーに在住している人から送付を受けたと聞いた。島内になかったものを海外在住者が保存していたということは、海外移住者の母村への心的回帰の状況を表現している一つの事例として見ることができようか。

(5) 『50周年記念誌』の卒業生の活動状況記録から見た具志川村出移民の状況

『具志川小学校50周年記念誌』内に記録された卒業生の活動状況（在外者名簿）を、出身字別、渡航先別に整理した表が、(第3表)である。これは、昭和8年当時における卒業生の活動状況を示したものである。その総数は251名である。記念誌内統計で明治15年の創立以来昭和7年までの初等・尋常科卒業生を概算すると、その数は3,190名であり、昭和8年当時、まだ成年に達していないと考えられる大正14年以降の卒業生を差引いても、約2,000名の卒業生がいたはずである。(第4表)251名は、死亡者、状況不明者を考慮に入れても、卒業生後の1～2割に過ぎない。しかし、ここに記載されている卒業生は、卒業後、島内（村内）において純粋に家事（自家農業を含む）に従事している者を除いたものであり、島の内外で社会的に活躍している者という評価が加えられている。

以上のことを考慮した上で、出移民の傾向を捉えると、次の諸点が指摘できる。

- ① 渡航先別で見ると、外国・外地在住者が5割弱を占め、在島者の約3割を超えている。それに、沖縄本島在住者、本土在住者が続く。その他は、八重山3を数えるに過ぎない。本土在住者の大部分が東京であることは特徴的である。
- ② 外国・外地の中を国別地域別に見ると、ペルーが最も多く、ブラジル、

第3表 具志川尋常高等小学校卒業者の活動状況（昭和8年）

字	渡航先	アメリカ・ハワイ			南米 ブラジル	シンガポール	フィリピン	南洋	台湾	朝鮮	樺太	中国・満州	外国・外地小計	沖縄 本島	八重山	本土	うち東京	在島	合計
		ペルー	アルゼンチン	ブラジル															
仲村	渠	—	21	—	5	—	—	—	—	—	—	—	26	1	—	—	—	4	31
具志	川	—	13	—	1	—	—	—	—	—	—	—	14	—	—	—	—	5	19
仲地	里	—	10	—	1	—	—	3	—	—	—	—	14	7	1	1	1	15	38
山	銘	—	5	—	2	—	—	—	—	—	—	—	7	3	1	3	1	7	21
西兼	城	3	2	1	8	—	—	2	—	1	—	—	17	21	—	7	4	16	61
大田	田	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	2	6	1	2	1	8	19
大上	江	1	—	1	3	—	—	1	—	1	—	—	7	2	—	—	—	11	20
鳥島	島	—	—	—	1	—	—	3	—	—	—	—	4	1	—	—	—	2	7
大北	原	—	4	—	—	2	3	—	—	—	—	—	15	—	—	1	1	5	21
大北	原	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	—	—	—	—	4	13
大北	原	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
合計		4	55	2	21	2	3	13	12	1	1	1	115	41	3	14	8	78	251

資料：『具志川尋常高等小学校50周年記念誌』昭和9年発行

第4表 具志川小学校卒業者数（昭和7年）

	男	女	計
明治15～21年	20名	0名	20名
明治22～30年	38	0	38
明治31～39年	304	46	350
明治40～大正4年	466	341	807
大正5～13年	518	437	955
大正14～昭和7年	570	450	1,020
計	1,916名	1,274名	3,190名

資料：『記念誌』より算出。

南洋，台湾，アメリカ・ハワイが続く。

- ③ 出身字別に見ると，活動者数は，西銘が最も多く，仲地，仲村渠，山里，鳥島，大田，具志川，兼城が続く。ちなみに，当時の字別戸数を揚

げると、西銘と鳥島が各々165戸で最も多く、大田130、大原106、仲地102、兼城76で、その他は各々50～60戸であった。

- ④ 外国・外地に限って見ると、一般的に言えば、「山地」または「上（アギ＝高い所）」の部落と呼ばれる仲村渠、具志川、仲地、山里、西銘の諸部落からは、南米とハワイへの渡航者が多いことが分り、「浜」の部落の鳥島からは、南洋の在住者が多いことが分る。

（鳥島の南洋移民については、鴨沢巖「移民動向からみた鳥島」『沖繩久米島の総合的研究』弘文堂、1984年、pp.135～177参照）

以上のことから、昭和初期においては、中南米、ハワイ、アメリカ等の外国移住は、南洋、台湾等の外地移住とともに、島外への移住の中で、数の上から見ても、その比重は決して小さくないことが知れる。また、社会的意味を加えると、海外移住は、村内ではより大きい比重を占めることとなる。

また、「上」の部落に、ハワイ、アメリカ、中南米出移民が集中していることから、この地域を中心にして、これらの出移民の特性を求めてみる。

3. 具志川村の出移民の特性—個別事例を通して—

具志川の出移民の特性を、まず個別事例を通して見てみよう。参考のために『具志川尋常高等小学校50周年記念誌』に記載されている在外者名簿を組替え、それに『久米島具志川村・具志川部落史』および聞き取りその他の資料を加えて昭和8年当時の外地および外国居住者名簿を作成し、第5表として掲げておく。これには、まだ不明のため欠落しているものがあるのは当然であるが、初期の渡航者で、その頃には死亡されていた方も原則的に含まれていない。また、昭和8年時点で帰国されていた方、および昭和8年以降に渡航された方も、原則的には記入されていない。例外的に記録されている場合は、（ ）を付してある。（第5表）

第5表 具志川村の外地および外国居住者名簿（昭和8年）

字名	姓名	渡航先	註
仲村渠○	1 山川重信	ペル	呼寄せの中心 初期移民
○	2 山川重光	同	重信の甥
○	3 山川重清	同	重光の弟、重信の甥、重信の養子長男

	4	前川 信盛	ペ	ル	ー	前川加那の長男	
	5	安里 昌隆	同	同	同	安里太良の2男(長男早死で実質長男)	
	6	安里 亀助	同	同	同	安里次良の長男	
*	7	祖根 憲康	同	同	同	祖根宗真の2男	
*	8	祖根 宗喜	同	同	同	祖根宗真の8男	
*	9	祖根 忠蔵	同	同	同	祖根宗真の5男 呼寄せの中心	
	10	祖根 宗信	同	同	同	祖根蒲太の3男(上記3名の従兄弟)	
	11	幸地 善吉	同	同	同	?	
	12	内里 清市	同	同	同	?	
**	13	田 幸 耕 吉	同	同	同	田幸鍋伊の2男(後にアメリカへ)	
●	14	内里 亀吉	同	同	同	内里加那の3男	
●	15	内里 清助	同	同	同	内里亀吉の甥(長姉の子)	
●	16	内里 清栄	同	同	同	内里亀吉の甥(3姉の子)	
●	17	(内里 清喜)	同	同	同	内里加那の長男 初期移民	
	18	祖根 昌盛	同	同	同	祖根字志屋2男	
◎	19	(山川 善源)	同	同	同	? 初期移民	
◎	20	山川善太郎	同	同	同	山川善源の長男	
	21	仲田 政輝	同	同	同	仲田加麻多2男 初期移民	
	22	祖根 昌政	同	同	同	祖根亀3男。長男宗春は権太へ。	
	23	仲田 昌英	同	同	同	?	
	24	幸地 政吉	ブ	ラ	ジ	ル	?
	25	祖根 宗勝	同	同	同	?	
◇	26	(祖根 清勝)	同	同	同	祖根宗真の長男	
◇	27	祖根 昌永	同	同	同	祖根宗真の7男	
**	28	田 幸 耕 善	同	同	同	田幸鍋伊の長男	
	29	田 幸 栄 蔵	同	同	同	?	
	30	(幸地 清洪)	同	同	同	幸地カメの子, 現在サンパウロでスーパー三軒をもつ。同夫人が久手堅忠誠(具志川)の叔母	
	31	(祖根 宗鴻)	ペ	ル	ー		
	32	(祖根 宗寿)	同	同	同	初期移民	
	33	(祖根 政輝)	同	同	同		
具志川*	1	我謝 政徳	ペ	ル	ー	我謝真牛の2男	
*	2	我謝 政行	同	同	同	我謝政徳の長男	
○	3	喜納 福一	同	同	同	喜納亀井の2男	
○	4	喜納 太郎	同	同	同	喜納亀井の3男	
	5	喜納 福安	同	同	同	?	
●	6	久手堅 憲永	同	同	同	久手堅太良の長男	
●	7	(久手堅 太郎)	同	同	同	久手堅太良の3男, 兄の呼寄せ。	

◇◎	8	高嶺 信行	ペ ル ー	高嶺亀の長男、妻は喜納源勝・栄喜の姉で、久手堅太郎従姉。戦前に帰国。
◎	9	喜納 源勝	ブラジル	喜納源栄の長男
◎	10	喜納 栄喜	同	喜納源栄の2男、兄源勝の呼寄せ。
	11	前川 四郎	同	前川カナ長子（字仲村渠）
	12	前川 昌永	同	？
	13	前川 昌文	同	？
◎	14	宮里 勝	同	宮里蒲多長男、喜納栄喜の妻の父。
	15	久手堅憲栄	同	久手堅鍋伊の4男。
◇◎	16	(久手堅忠誠)	同	戦後昭和36年渡航。高嶺信行の長女と婚姻。
仲地 *	1	仲村渠昌志	ペ ル ー	大正3年契約移民としてペルーへ。具志川村人会会長。
*	2	仲村渠昌壱	同	仲村渠昌志の従兄弟、昌志の呼寄せ。
	3	山城 昌吉	同	山城昌松の長男。（字山里）
	4	程久村昌重	同	長男。ペルーで死亡。家督は2男の昌栄が継ぐ
○	5	山城 亀井	同	山城3兄弟の長兄。明治43年渡航。
○	6	山城 昌睦	同	山城亀井の次弟。兄の呼寄せ。
○	7	山城 昌次	同	山城亀井の3弟。兄の呼寄せ。
△	8	山里 昌吉	同	明治31年生。山里の仲村渠景勝の妹と結婚。仲村渠景勝(山里3)を呼寄せる
	9	沢 砥安栄	同	？
	10	仲村渠昌進	同	ペルーで死亡
	11	田原 秀輝	ブラジル	明治29年生。田原蒲多の2男。（字山里）ブラジルで死亡。子孫定着
	12	(佐久川真加良)	ペ ル ー	大正末期渡航、昭和16年カヤオで死亡。
◇	13	(保久村昌元)	同	？
◇	14	(保久村昌永)	同	昌元の長男。親と同行。昭和18年帰国
	15	仲村 景恭	台 湾	
	16	喜世盛昌泉	台 湾	
	17	嘉手刈景次	台湾(台東)	警官
山里 *	1	福里 昌次	ペ ル ー	福里昌清の2男。長兄昌清に男子なし戦前帰国後死亡。
*	2	福里 昌全	同	福里昌清の養子。福里昌次の呼寄せ。戦後帰国
△	3	仲村渠景勝	同	景林の長男、妹婿山里昌吉の呼寄せ
	4	(仲村渠昌亀)	同	仲地の仲村渠昌志の呼寄せ。仲村渠昌直の長男、昌志の義弟。昭和8年に帰国
	5	山城 昌平	同(ブラジル)	山城昌松の長男。大正年間渡航。
●	6	玉那覇昌良	ペ ル ー	玉那覇ウシ5男。

	●	7 (玉那覇昌徳)	ペ ル ー	玉那覇ウシ2男。明治26年生 大正10年頃渡航 昭和5年本籍地で死亡
	□◎	8 上江洲智研	ブラジル	上江洲智浩の4男。家族を残し単身大正15年ペルーからブラジルへ。昭和17年帰国
	□	9 上江洲智仁	アルゼンチン	上江洲智浩の2男。大正9年分家 昭和3年渡航。
		10 大田昌綱	ブラジル	大田昌伝3男。大正末家族を残し単身渡航。
		11 (仲村渠昌保)	ペ ル ー	仲村渠昌健の4男。昭和2年カヤオで死亡
		12 (山里 滋海)	ハ ワ イ	昭和8年渡航。ハワイ滋光園僧侶。
		13 (山里 桂石)	ハ ワ イ	戦後渡航。チンペーのトウトウ山里ハツの弟、山城昌平の長女トシと結婚
西銘		1 与世盛智郎	USホノルル	大正4年 ワイパフ学園
		2 仲村渠昌広	US ロス	大正3年ハワイ、大正8年頃ロスに転住。
		3 山城 栄良	US ロス	
		◎ 4 上江洲智維	ブラジル	上江洲智紀長男
		◎ 5 上江洲智昇	同	上江洲智紀2男
		◎ 6 (上江洲智恒)	同	上江洲智紀4男。妻と昭和9年渡航
		◎ 7 (上江洲智平)	同	?
		◎ 8 上江洲智山	同	?
		9 山里 智盛	同	山里智覚の2男
		○ 10 山里 智茂	同	山里智寿長男
		○ 11 山里 智才	同	山里智寿2男
		○ 12 上江洲智訓	同	山里智寿長女と養子縁組。上江洲智済6男
		13 盛吉智珍	同	?
		14 我那覇昌朝	ペ ル ー	?
		15 我那覇昌久	同	我那覇蒲戸長男
		16 仲村渠昌信	アルゼンチン	?
		17 内間 広和	台湾(台北)	公民学校
		18 与世永智輝	台湾(大赤山)	与世永智雄長男。警官。
		19 安村 仁祐	樺太(珍内)	小学校
		20 (安慶名幸保)	ブラジル	安慶名幸源2男。明治29年生 大正12年分家独立。昭和9年頃渡航。
兼城		1 新里 盛 栄	台湾(新首州)	警官
		2 仲宗根正行	中華民国天津	
大田		1 天久 栄賢	アルゼンチン	天久真牛4男
		2 仲宗根正忠	ブラジル	(戸籍名、正通)

	3 仲宗根チヨ	ブラジル	
	4 喜久里智研	同	昭和初期に移住、後続ナン
	5 前城仁榮	南洋トラック	夏島
	6 渡嘉敷盛文	朝鮮(黄海道)	内東里
	7 上江洲智吉	USハワイ	ハワイ島ヒロ市又吉病院
上江洲	1 真境名幸正	台湾(基隆)	小洲要塞司令部官舎内
	2 真境名真永	台湾(基隆)	小洲要塞司令部官舎内
	3 真境名幸信	台湾(嘉義)	曾文駅官舎内
	4 東江盛研	ブラジル	?
	5 (仲村渠智紀)	ブラジル	仲村渠智広長男。昭和8年リオ。
鳥島	1 仲宗根堅守	南洋パラオ島	コロール村産業試験場内
	2 仲宗根堅保	南洋	南洋庁水産試験場内
	3 国吉清正	台湾	警察官吏
	4 国吉清吉	台湾	警察官吏
	5 国吉安	台湾	同上の妻
	6 国吉昌幸	南洋パラオ島	
	7 国吉昌得	同	
	8 国吉永基	同	
	9 国吉幸慶	同	
	10 国吉昌太	同	
	11 仲村元市	同	
	12 糸敷鉄雄	同	
	13 糸敷岩盛	同	
	14 糸敷丑之助	同	
	15 糸敷正春	同	
大原 *	1 比嘉良秀	ペルー	?
* *	2 比嘉良仁	同	?
* *	3 比嘉良輝	同	?
* *	4 比嘉良達	同	?
	5 大城盛信	比ミンダナオ	ダバオ州
	6 勢理客宗豊	同	パギオ耕地
	7 渡慶次太賀	同	イヌワンパルタン耕地
	8 末吉盛徳	シンガポール	
	9 末吉朝助	同	

資料：『具志川尋常高等小学校50周年記念誌』（昭和9年発行）「卒業者の活動状況・在外者簿」中の外地・外国居住者115名のみを記す。（）内は別資料による追加。表中の○*等の印は、親族関係にあるものを示す。

この表には、各人の出移民に際しての各人の人間関係を中心に註記してある。その中の、いくつかについて、例示的に、少し詳しく記載しておく。

個人名は、公刊された資料に基づいているし、村の移民の記録を残すという意味を含めて、そのまま用いている。

移住した人の一部の家族関係については、前出の拙論「久米島の海外出移民の社会経済的特性」に、図で示しておいた。

(1) ハワイおよびアメリカ合衆国向渡航の事例

沖縄からの海外移民は明治32年（1899年）のハワイ移民で始まった。しかし、明治40年に自由移民は禁止され、それ以後は呼寄せ移民だけに制限された。『具志川村史』によれば、「具志川村からは、明治39年に西銘の上江洲智吉と上江洲智倫（林）が医師として渡布（ハワイ島ヒロ市又吉病院）、大正3年に中村（仲村渠）昌広、同4年に与世盛智郎と西銘出身の渡航が続いた。昭和8年に山里出身の山里景克（慈海）が渡布して慈光園を創建、戦後に弟の山里桂石も渡布して兄と共に活躍している。中村（仲村渠）昌広は大正8年にハワイから北米ロスアンゼルスへ転住、その頃西銘出身の山城栄郎（良）も北米に居住するようになった。太平洋戦争でペルーから仲村渠の田幸耕吉が北米に送られて定住し、戦後は上江洲智秀がロングビーチの米国政府立病院で活躍している。」（578ページ）とある。

このように、ハワイ、アメリカ合衆国については、その例が少ないだけでなく、この事例を見ても、その職業は、医師、聖職者といった特殊な知的職業であることが分る。上江洲智倫は、チンペーのトウトウ（島の守護神を祭る司祭者）の血筋に当る旧家、石垣殿内（トンチ）の出であり、山里出身の山里景克（慈海）も山里殿内と呼ばれる旧家の出である。上江洲智秀はハワイで生れた上江洲智倫の子（長男）であり、日本の慶応大学医学部に留学し、父の後を継いだ。ちなみに付け加えると、次男も東京大学医学部に学び、惜しくも沖縄戦で死亡されたとのことである。

(2) ペルー向渡航の事例

上記の具志川村史には、既に述べた歴史的規定による第1期移民と目される大正前期までの移民については、次のように記されている。「南米ペルーへの沖縄移民は明治39年に開始されたが、具志川村からは翌明治40年

に仲地の山城山戸が渡航、42年には具志川（字）の我謝政徳、仲地の仲地宇志屋、大田の上江洲智金、43年に仲地の山城亀井が渡航した。大正3年には仲地の山城英逸、仲村渠昌保、仲村渠昌志、福里昌次、大正4年に仲泊の仲村渠広郎がそれぞれ渡航し、大正6年には仲村渠（字）の前川信榮、仲田清輝、山川重信、内里清喜、山川善源、具志川の久手堅憲英、喜納太良……が相次いで渡航し、とある。

仲地の山城山戸については、村史の記録に名前がのっているが、その内容についてはつまびらかでない。

具志川の我謝政徳は、我謝真牛の次男である。長男は日露戦争に参加したということを、村の人は記憶している。それによって死亡したかどうかは定かではない。死亡しているとすると政徳は、実質的には長男の立場に立つ。明治42年に契約移民としてペルーに渡航している。長男政行は明治42年に本籍地で出生しているの、妻子を村においての単身渡航であったと考えられる。年次はつまびらかでないが一時帰国し、少なくとも大正7年頃妻と再渡航していることは確実である。その後、(多分大正15年)沖繩において中学まで進学させ在学していた長子我謝政行を呼寄せ移民としてペルーに呼寄せしている。以後一家は、ペルーのカヤオで生活を築いている。字具志川では最初のペルー移民であったので、その移民動機は経済的理由と考えられているが、字内では先覚者として評価されている。

仲地の仲地宇志屋については、村史の記録以上のことは、不明である。ただし、佐久川真刈（真加良）が大正末年にペルーに渡航したのが、仲地宇志屋の呼寄せによるものであったとの証言があり、以後の移民継続に役割を果たしていることはたしかである。しかし、呼寄せによって渡航した佐久川真刈と妻ウシは、昭和4年にカヤオで長男を出生したが、この子は昭和4年に死亡、続いて昭和6年に真刈自身が死亡して、係累が切れてしまった。

仲地の山城亀井は長男である。村史では明治43年に渡航したと記録されているが、村の人の記憶では、大正6、7年頃という。その記憶の根拠には、その頃、山城亀井の弟の山城昌陸（次男）、山城昌次（3男）が相次いで渡航していることがある。両方が正しいとすれば、一時帰国して再渡航し、その際弟を同伴したと考えられるが、たとえ帰国しないでも二人の弟を呼寄せたことは確かである。記録と村の人の記憶を探るかぎり、戦前（昭和10年代）に帰国し、村で生涯を終えている。

仲地の仲村渠昌志（昭和8年当時の在ペルー具志川村人会会長）は、仲村渠昌加の長女ナベの長男で、契約移民として、大正3年（村史では3年とあるが聞き書きでは5年ともいう）ペルーに渡る。ペルー、カヤオで食堂（カフェテリア）を開く。妻ナベとの間にカヤオで2男4女を得て、昭和13年に家族一同と帰国。帰国後1女をもうける。戦後、夫妻は、3女、4女、2男を伴ってペルーへ再渡航し、彼の地に安住し、彼の地で生涯を終える。

仲村渠昌志は、大正11年、異父弟である山里の仲村渠昌亀（4男6女の長男）を単身呼寄せせる。仲村渠昌志と同じくカヤオで食堂（カフェテリア）を経営し、大正14年、仲村渠昌則の3女ウシ（高等小学校卒業。当時女子で高等科に進学したものは10名に足りなかったというから、高学歴者である）を花嫁移民として呼寄せせる。カヤオにて1男2女を得、多忙ながら家業は順調であったが、健康を害し、昭和8年、家族一同で帰国。

仲村渠昌志は、また、昭和初年に従兄弟の仲村渠昌壱をも呼寄せた。仲村渠昌壱の家族はペルーに定住した。

山里（村史では仲地）の福里昌次は、福里昌勇、ナビの次男で、大正3年に単身ペルーに渡航した。渡航の動機は経済的なものを除いて不明である。昌次の渡航後の活動は、不明の部分が多いが、数回、日本への帰国と再渡航を繰り返しているという証言があり、後続移住者への情報提供と呼寄せに一定の役割を果たしたことがうかがわれる。昌次の兄の昌清（長男）は家督を継いでいたが、子供は女子ばかりであり、そのため、大正15年仲村渠昌性、ウシの3男昌全を養子に迎えた。同時に仲村渠昌義、ウトの長女カメを養女として迎え、両者を婚姻させる。昭和3年に、昌次は、兄の養子の昌全をペルーに呼寄せ移民として呼んでいる。

福里（旧姓仲村渠）昌全は、叔父昌次の呼寄せで、昭和3年家族を置いて単身で移民した。契機は叔父の呼寄せであるが、動機は、全く経済的なもの、つまり〈金儲け〉であったという。昭和初期は、大正中期まで比較的好調に支えられていた黒糖の価格が大正9年以降暴落し、黒糖1樽（120kg）が10円位であり、それに相当する原料砂糖きびの価格は3円ほどで、人を雇って刈り取ると欠損が出たという。昭和3年頃のペルーへの渡航費は単身で120円を必要としたので、渡航に当って妻の実家の親から100円を借りた。

ペルーのカヤオでは、岸本憲栄という沖縄本島の名護出身の人の経営す

る理髪店で働く。月給は日本円で約50円。ここから生活費その他すべてを賄う。ここで7～8年働いたが、この仕事では金はたまるものではなかった。その後、パンの行商を始め、朝の4～5時から夜の8～9時まで働く生活を続け、その金(約800円)を持って叔父昌次は戦前に帰国し、本家の家督を継いだので、昭和15年福里家との養子縁組を解消し、仲村渠姓に復籍。第2次世界大戦後に、アルゼンチン・ブラジル、アメリカ合衆国を經由して帰国、千葉の農地を購入して居住。その土地が公共施設の建設地として、国家の買収の対象となり、その土地を手放なして沖縄本島に居住するようになった。

山里昌吉は、仲地の山里ウシの子であり、大正中期に単身でペルーに渡航している。渡航の契機は明らかではないが、カヤオで理髪店を開いているので、上記福里昌次が渡航の仲立をしていることが想像される。大正14年仲村渠景林、タルの2女京を花嫁移民として呼寄せる。前期の花嫁移民仲村渠ウシと同じ墨洋丸の同船者として渡航しているので、その年は明らかである。

仲村渠景勝は、山里の仲村渠景林、タルの子、3男3女の長男で、前記の2女京の兄に当る。昭和2年10月17日、22歳で独身の時に、妹婿の前記の山里昌吉の呼寄せでペルーに渡る。船は銀洋丸であった。動機は、「当時大変不景気であったこと」、「家は困難であったこと」、「家を興すため」と考えていたことを覚えているという。渡航費は土地を担保にして用意した。ペルーのカヤオで、妹婿(義兄)山里昌吉の理髪店で働く。理髪の技術は、そこで初めて身につけた。ただ真剣に働いた。月の収入は50円ほどであったが、その中から義兄が郷里に送金してしてくれた。借金も返し終え、幾分の手持ちを得て、昭和16年1月に帰国。その時は「家の債務を全部払っていたので、安心して帰ってきた」という。長男の義務を遂行できたという意識に支えられていたからであろう。帰国後、36歳で結婚した。

仲村渠の山川重信は、長男であった。大正6年に、ペルーに渡航した。重信の甥の重清の記憶によると、当時具志川村には、移民会社(徳田移民会社という名前であった)による海外移民の募集があったという。その頃30歳前後の者が、土地を担保として金を借り、それを資金として渡航していった。さとうきびの収穫と運搬が労働の契約に入っていた。夫婦でいった場合が多かった。重信は単身で渡航した。農場を出て町に住み、カヤオで雑貨屋を開くようになってから、生活は幾分良くなった。昭和初年に甥

の山川重光を呼寄せた。重信には男子がなかったので、同じ甥の山川重清（重光の弟）を養子として迎え、同じくペルーに呼寄せた。昭和13年、重信が死去したので、重清は帰国した。店は、実兄の重光にあずけた。（重光は、昭和50年頃にペルーで死去した）。この頃に帰国した者は多い。それは、治安が悪く、排日的な雰囲気が強くなったためでもある。重清は、帰国の時、友人知人の子供を3人連れて帰ってきた。ペルー在住の間に、渡航の際の借金は、全て返済し終え、それ以上の送金は、郷里に残した家族の生活費に使った。当時の移住者は、「旅に出て、金を持って錦を着て帰る」ということが目的であった。重清氏は、「今考えてみると、移民会社の口車に乗ったと思うが、島に残っていたよりは、ちょっと生活が安定したのではないかと思う。長男が向うに行くのは、やはり向うの条件が良かったからである」という。

(3) ブラジル向渡航の事例

ブラジルへの第1回日本移民、いわゆる笠戸丸移民が出発したのは明治41年のことであり、第2回目は明治45年のことであった。第1回移民781名中355名が沖縄からのものであり、第2回移民では421名が沖縄からのものであった。『具志川村史』には、「初回と2回の移民船で具志川村からブラジルに渡ったのは、西銘の山里智寿、宮城保守、上江洲智健、仲地の又吉真加良の4人であった。」と記されている。大正2年から大正5年まで、沖縄からのブラジル移民は禁止されたから、この4名が、「先覚者」としての意味を持つ。

山里智寿は、西銘の出身である。渡航は、家族全員で行われた。妻カメ、長男智茂（明治33年生）、長女ウシ（明治36年生）、2男智才（明治40年生）を伴った。職業は不明であるが、ブラジル、サントス市マルシャルペゴジーニョ街に定住。長男は花嫁節を味寄せて、ブラジルで結婚、長女は、上江洲智済の6男智訓を呼寄せて、大正15年にブラジル、サンパウロ州で婿養子縁組をする。2男は、仲里村比嘉出身の花城清光の4女モウシと昭和9年にサントスにて婚姻し、一家定住する。しかし、その間智寿は昭和7年に死亡し、昭和10年に長男智茂が家督を相続した。

宮城保守は、明治9年、宮城保輝、ウシの長男として生れ、単身ブラジルに渡航している。昭和4年ブラジル国サンパウロ州サンビセンサ郡サンビセンテ市で死亡した際、死亡届けが知人仲村渠良信によって行われてい

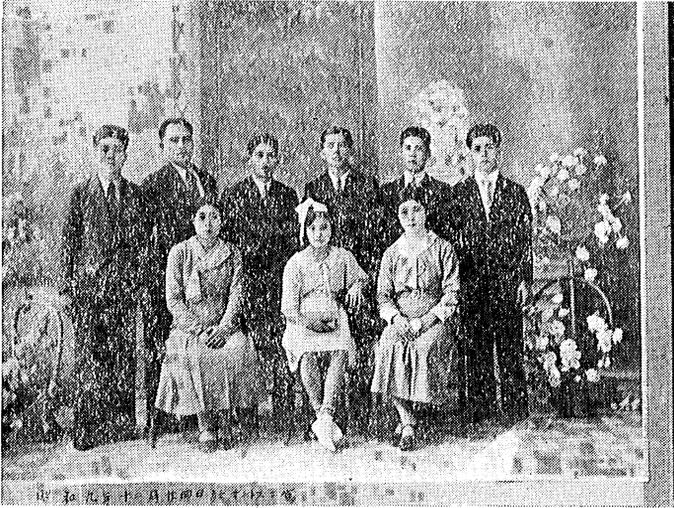
る。仲村渠良信は昭和初年の渡航者であるが、この点からすると、仲村渠良信は宮城保守のついでで渡伯したものと考えられる。

上江洲智健は、上記の宮城保輝、ウシの2男であり、明治26年に上江洲智良、カメの養子となり、上江洲家を相続する。したがって、姓は異なるが、上記の宮城保守と兄弟であり、兄と同じく単身で渡航している。渡航後の詳細は不明。

又吉真加良については、不明。

これらの「先覚者」によって、ブラジルの事情が伝えられたことは、確かなようである。再び『具志川村市』に戻る。「大正2年から大正5年まで沖縄からのブラジル移民は禁止されたが、大正6年と7年にはまた多数の沖縄移民が送り出された。翌大正8年以降は呼寄移民だけに制限され、それが解除になったのは大正15年であった。大正年間に具志川村からブラジルに渡ったのは、仲村渠の幸地政吉、田幸栄蔵、具志川の喜納源勝、久手堅憲栄、山里の大田昌行、山城昌平、西銘の上江洲智正*兄弟三人（*引用者註：上江洲三兄弟というと上江洲智正ではなく、上江洲智維、智昇、智恒のことであろう。）久間地の安慶名幸保、仲泊の仲村渠広郎（ペルー、アルゼンチン経由）などで、昭和の初期には西銘の山里智才、具志川の宮里勝、喜納英信、仲地の田原秀輝、仲泊の仲村渠良信、大田の喜納里智研、仲宗根正通がそれぞれ渡航し、戦後は具志川村の久手堅忠誠、喜納猛、大田の仲宗根正剛、当間兼祐、兼城の金城昌高がブラジルに渡っている。」と記録されている。

ブラジルへの渡航者の人間関係は、前出の拙論に代表的なものを図で示しておいただけでなく、本論の第5表に、不足した分を補って示した。また『具志川部落史』にも、喜納家と山里家との事例が示されているので、ここでは、多くを触れない。ただ、上江洲智俊氏に提供された写真資料は、上江洲智俊氏の父である上江洲智研と大正年間に渡航した上江洲智維・智昇・智恒の3兄弟との現地における関係、および3兄弟の末弟智恒夫妻と上江洲智平・静枝（関係不明）とが、前者によって昭和9年に呼寄せられていることを明らかに示しているため、その写真を掲載するに止める。この写真には、脇書きに、「皇紀2594年、西暦1934年、昭和9年12月24日、上江洲智恒、妻和子、上江洲智平、上江洲静枝伯着記念橋」と記してある。（第2図）



皇紀二千五百九十四年 昭和九年十二月二十四日
 西歴一千九百三十四年
 上江洲智恒妻和子上江洲智平上江洲静枝伯着記念橋

上江洲智平
 上江洲智研
 上江洲和子
 上江洲智維
 山里ニーナ
 上江洲智昇
 上江洲静枝
 上江洲智山
 上江洲智恒

第2図 上江洲家関係者の着伯記念写真
 (写真中上江洲智研氏の長男〔在島〕上江洲智俊氏の提供を受ける)

(4) アルゼンチン向渡航の事例

『具志川村史』によれば、「アルゼンチンへの移民は、大正2年から開始されたが、具志川村からの渡航者は、山里の上江洲智信，上江洲智仁，上江洲智英，大田の天久栄賢，天久栄金，天久武一の数人である。」とだけ記されている。

上江洲の3名については、不明である。天久栄金と天久武一は、戦後（昭和30年頃）の渡航者である。

天久栄賢は大正初年の生れで、天久真牛の4男である。昭和初年にアルゼンチンに渡航した。西原農林学校に在学中、先生の影響を受けて、アルゼンチンにあこがれていた。学校の視察の名義で単身アルゼンチンに渡った。しかし、渡航資金の額は460~470円ほどであったという。兄（長男）（現在も具志川村で農業に従事している）と儀間の友人とが出したという。渡航後は、ブエノスアイレスで洗濯屋を始め、1年間で兄の所に400円送金してきた。数年後、呼寄せで妻をめとり、2男2女を設けアルゼンチン

に定住した。戦後一時帰国し、再渡航する。昭和30年頃、天久栄金と天久武一を呼寄せた。天久栄金は昭和3年生れで、天久栄賢の従兄弟に当る。昭和2年生れの天久武一も親戚すじに当り、アルゼンチンでは二人共、独立して洗濯屋を開業した。天久栄賢は昭和59年にアルゼンチンで死亡し、天久武一も昭和58年に死亡した。現在天久栄金がアルゼンチンに在住している。

この場合は、長男型でもないし、家の経済を支えるという型でもなく、具志川村においては例外的なものとなっている。

(5) 南方向け渡航について

南方向け渡航については、『具志川村史』は、次のように記している。「フィリピンのダバオへは、昭和2年に仲村渠の山川清光、山川昌則、昭和12年に山川仁喜、具志川の久手堅憲永などが渡り、マニラ麻の栽培に従事した。」また「南洋諸島への移民は、大正4年1月、糸満漁民によって開始され、その中に鳥島の仲宗根清が参加し、南洋進出の途を開いた。大正11年、南洋興発株式会社への労務者募集で多数の沖縄移民が渡航、鳥島からも数世帯がサイパン島へ渡った。それから昭和5、6年にかけて鳥島からの南洋移民は年々増加し、漁船の整備と共に、トラック、ポナペ、パラオの諸島へ70世帯以上の漁業移民が進出した。昭和12年12月、国吉朝助（当時村助役）が25トン級の漁船を建造してトラック島へ廻航、それに伴ない30世帯以上の呼寄せ移民が渡航した。」とある。

したがって、南方移民は、もっぱら鳥島出身の漁業移民によって占められているので、これらについては、前出の鴨沢報告に譲る。ただし、「上」の部落からも、南洋興発株式会社に関わる農業移民として南方に渡航した者があったことは、第5表に示されている通りであるが、それは例外的とってよいほど少ない。

4. 出移民と村との関係から見た出移民の性格

(1) 学校及びチンペーへの寄付を巡って

出移民またはその移民集団の性格を理解する要素としては、母村との関係の仕方の理解は必要であろう。その場合、世俗的経済的側面と理念的心理的側面の両面において事実の確認をしておこう。移民各自の動機の大半

は、経済的動機であった。それも、母村の家経済の維持がその主要なものであった。したがって、その量は明確には把握できないが、各自の送金は、できる限りにおいて頻繁に行われた。それと同時に、いずれは母村に回帰することを予定しているという意味で出稼ぎ性を持っている移民については、理念的心的側面のきづなを世俗的経済的側面において表現することは当然のことである。これを村へのアイデンティティーの問題として考えると、このアイデンティティーは、self-identity と social identity との二つの側面で表現されたと考えることができる。村へのアイデンティティーは、村で最も古い世俗内社会の知的心的中心であり、自らがそこ出身であった大岳（具志川）小学校と、世俗外的心的中心であるチンペーへの寄付、送金という社会的行為として表現された。

『具志川小学校50年記念誌』記録によると「昭和4年、秘露久米島村人会より御大典記念として、大鏡、柱時計寄贈あり」とあり、さらに、『具志川村立大岳小学校創立90周年記念会誌』記録によると「昭和8年、創立50周年記念として奉安殿の建設と校旗の樹立あり。在秘具志川村人会の献金による」とある。同『90周年記念誌』によれば、第2次世界大戦後においても、「昭和26年、在秘具志川村人会から教材資金2万円来る」とある。学校に対する寄付行為については、学校の正式記録に残っているが、帰国した渡航経験者に聞いた場合、「大時計、大鏡」については記憶に残っているものがあつたが、その他のものについての記憶は稀薄であった。

他方、チンペーに対する寄付、送金は、少なくとも2度行われている。そして、これについての村人の記憶は、強烈である。

そもそも、チンペーとは島（具志川村、仲里村両村）の守護神であり、神殿は現在、具志川村仲地にある。その由来を尋ねると、チンペーとは君南風（きみはえ）のことであり、沖縄の高級神女のことである。『君南風由来併位階且公事』（略称『君南風由来記』）によれば、往古から三十三君の一人といわれる。その発祥については、「太古の世、久米島に姉妹三人有り。長女は首里弁ヶ岳に栖居し、次女は久米島東岳に栖居し、後、八重山（註：石垣島）に至りて宇本岳（於茂登岳）に栖居す。三女は久米島西岳（宇江城岳）に栖居し、君南風職に任ず。」（『球陽』説下し、角川版）とある。「きみ」とは共同体神である「のろ」の上位にある最高神女のことで、チンペーは具志川村だけでなく仲里村を含めた全久米島の守護神である。

チンペーのトウトウ（山里ハツさん）の話によれば、チンペーの社殿は、

もともとはもっと西岳（現宇江城岳）に近い所にあった。その後今の仲地の場所に移された。現在の社殿は、昭和53年に建立されたものである。現在の社殿の前のそのまた前の建物は、草葺きの民家の住居を転用したものであった。しかし、チンペーは火の神であったので、それではいけないということで昭和12年に、村議会がその改築を計って、村の事業として瓦葺き建物への改築を進めた。その際、村民に寄付を仰いだ。その理由づけは、島の守護神であるというだけでなく、次のような取決めがあるからである。

前記の『君南風由来記』は、1697～1706年（尚貞29～38年）ころ成立したもので、その中には、君南風の由来、位階、公事について記されている。この中には、君南風職の知行高、君南風殿内（ドゥンチ）の普請修補、免夫の人数などの規定、久米島において、君南風が管掌する各種祭祈、仲里・具志川両間切から供出される人数・道具などの公事について記されている。すなわち、村人は、祭事や具体的な神殿の普請などについては、一定の労働を提供する義務があり、またこの義務を遂行することによって、村の構成員であることがアイデンティファイされる。それが現在寄付金を拠出することによって（金で代替されるようになったのが、何時からかは不明）、その義務が遂行されることになる。

当時の寄付の記録は、寄進帳として残されている。寄進は在外者にも及び、当時アメリカ在住の西銘の与世盛智郎、山里の山里景克（滋海）、西銘の仲村渠昌広、ブラジル在住の上江洲智維、上江洲智昇、上江洲智研、太田昌綱、又吉真加良、田原秀輝、田幸栄蔵、山里智盛、在台湾の仲村渠景恭、吉永昌永、嘉手刈景次、山城昌成氏等の名前が記録されている。その中で、ペルー在住者は、個人としてではなく、在秘具志川村人会の名で寄進が行われている。

寄進帳によれば在ペルー具志川村人会員の寄付金は、総計 299 円60銭也である。当時、島での日当は、50銭ほどであったから、その金額は少ないものではない。渡航経験者の記憶によれば、呼び掛け人は、仲地の出身の仲村渠昌志氏（当時の在ペルー具志川村人会会長）であり、その呼び掛けに応じた人は、30～40人ほどであったという。してがって平均すれば、一人当たり5～10円の拠出金となる。当時の村の人の大多数が、1～2円の拠出金であったことからすると、当時アメリカ在住の与世盛智郎の50円、山里景克（滋海）の50円は特別としても、在外者中、ペルー在住者の拠出金

も、一人当たりとして決して少なくない。そして当時、渡航費の返済や残留家族へ送金が、月に10～20円ほどであった人々にとっては、相当の負担と考えることができる。チンペーの、それはとりもなおさず村への社会的義務の遂行を効果的に表現する方法として選ばれたのが、寄付金の使途を特別に鳥居建設として指定することであったと考えることができよう。下記の往復書簡の一部は、その間の事情を物語るものといえよう。

「拝啓 その後、皆様御達者の事と存じます。我々当地に於きましても村人一同元気で活動致し居ります。御安心下さいませ。去4月16日飛行便で書面送付致しましたが、無事御受取りなされた筈と思ひます。

J君へも知らせてありましたので、早速其の資金は貴委員の方へ御渡しなされた筈と思つて居りましたが、去13日にJ君より書面が来て居ますので、又今回あらためて御知らせ申す訳であります。彼のJ君よりの通知に依れば、具志川のT君へ資金依頼しますから左様御承知せよとの事で、本会は至急書面をT君へ出して貴委員の方へ資金御渡しなされる様にと知らせてありますから、彼のT君より全額御受取り下さいますよう御頼み申します。

金額は以前御知らせ申し上げた通御承知の事と存じます。

其の資金貴委員の方へ御渡しするのが延々しましたのは、吾等互に行き違いが有つて、ながながになつた訳でありますから、左様悪しからず御願ひ致します。我が村人会の御願ひとしましては、出来る事なれば一日も早く目的を完成なさつて戴きたい事でありませう。

前にも申し上げましたが、本会一月の定期総会の時にも此資金の件に付いて大分問題が八益しくして居りましたが、漸く会員をなつとくさせて委員の方へ資金引渡す様になつた次第であります。会員としましては、目的の鳥居を早く建設させる様希望して居りますので、私も会員皆様の希望を委員の方々へ御伝へしまして、本会の目的を達せさせる様に致しますと答弁してありますから、左様皆様も御承知の程御願ひ致します。

今後、両方共連絡を取つて下さいませ。

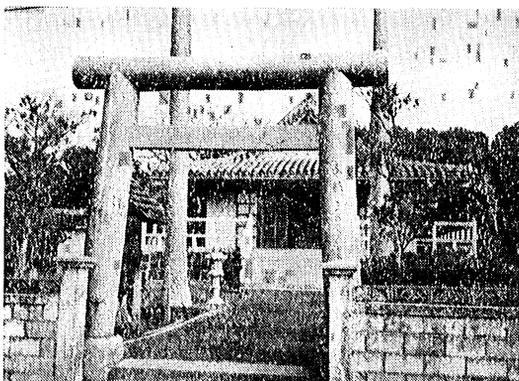
委員各位の御奮闘を御祈り申します。

細しき事は又次便に。サヨナラ。

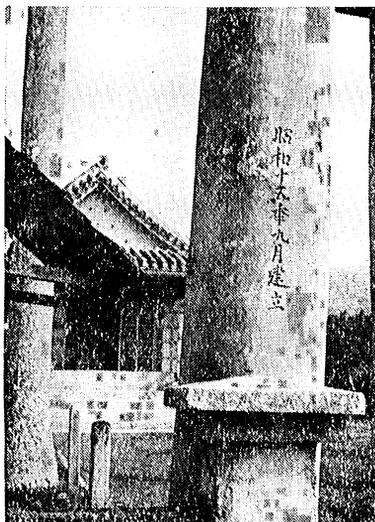
4月16日

在秘具志川村人会 会長 仲村渠昌志

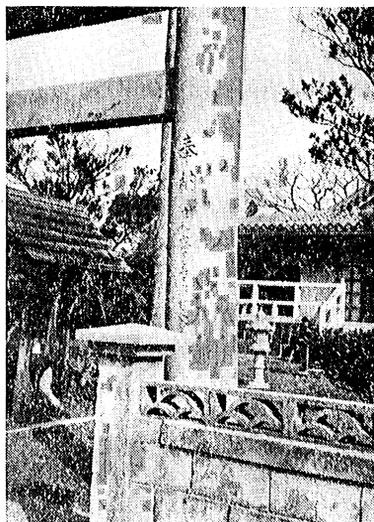
山里 昌永殿



第3図-a チンペー社殿全景（昭和60年）



第3図-b 鳥居左「昭和15年9月建立」と記す



第3図-c 鳥居右「奉納在秘録具志川村人会」と記す

外 委員殿

(1940年4月18日ペルー国カヤオ発信)

(註：文章内の固有名詞は、記号とした。漢字、かな使いはそのまま。強調部分の
 ・・は引用者)

鳥居は、昭和15年に完成し、その後の本殿の改築後も、そのまま現存している。
 (第3図 [写真] a, b, c)

(2) 戦前における移民に対する村の評価

戦前の具志川村における移民の評価を現在の村民たちから聞取ること
 は、ほとんど不可能である。それは、50年という時間のため、当時を記憶
 している人が現在ほとんどいなくなっていること、またたとえ現存されて
 いる場合でも、50年の歳月の間にその記憶と評価が変質していると考えら
 れるからである。しかし、次の文書から、戦前における村の評価の方向を
 読取ることができよう。

前出の『具志川尋常高等小学校50周年記念誌』に記録されている記念式
 典での出席者各位の式辞の多くは、本具志川尋常高等小学校の歴史の古
 さ、その回顧と伝統の確認、教育の普及、国家有為の人材の育成への貢献
 を語っている中で、昭和9年の記念誌発刊にあたって、当時の具志川村長
 吉浜智改氏が寄せた「所感」という一文は、次のように書かれている。短
 いものなので全文を掲げよう。

「開校50年、静かに光輝ある我が具志川校の校史を回顧する時、吾人の
 胸奥には唯限りなき感謝の念に満ちるのみである。

殊に近々24、5年以來、著しく郷村の膨張発展せし形勢の潑刺として生
 気を示し、今や孤島民といえども彼の安政年中吉田松蔭の海外密行を企て
 処刑せられて時代の夢を破り、意気衝天の勢いを以って村民の海外県外に
 勇飛を試みる若年と共に其の数を増し、現在教育家として帝都の中央に活
 躍せる当原昌松君、山里昌英君夫妻、及び喜友永伸君、内間仁徳君、盛吉
 智順君、鹿児島中学に仲村渠昌信君、樺太に安村仁祐君、台湾に内間広和
 君、伯国に上江洲智昇君、軍人には、彼の熱海大戦に万里長城を乗り越え
 武勲嚇々たる鬼特務曹長上江洲智思君あり、宗教家には米領ハワイの天地
 を教化して偉名ある与世盛智郎師及山里滋海師あり、実業家には南米伯国
 に上江洲智維君其他幾多の先輩有志あり、秘露亦如斯北米には仲村渠昌
 広君の活動に至る皆各自天与の力量を發揮し、往々外人をさへ驚倒せしめ、

天下を席卷せんとする概ある士の俳(輩)出を見るに至り、屹然として世界的に光輝を放ちたる現実の此の全貌を直視する時、是等偉人傑士の独りとして母校の門を出でざるなきに至りては一層感激の念を深からしむるものである。

而して誰しもが校庭を流るゝ東来江水の清き流の無限の大慈愛に抱育せられし余光なることに想到するであろう。富祖古嶽の豊かなる愛の姿、泰然として万古不変の大嶽の偉容、洋々たる際涯万里の莊観、是成が具志川校の全姿である。

下手でも聯句すれば『東来江水遠含情。偉人豪傑此門出』とでもして見たい。

幾蔗成が母校の幾久不易偉人傑士の門ならんことを。昭和9年3月31日」

同じ記念誌に掲げられた、前出の在外者名簿には、在外居住地とともにある部分については職業が明記されている。ある部分とは、いわゆる公務職である。その中で、特徴的なのは、警察官と教員である。

当時の外地である台湾、朝鮮、樺太に関して見ると、台湾は12名、出身字に特徴はないが、同資料中に記されているその職業を見ると12名中8名が警察官であり、1名が教員である。樺太の1名も教員である。ひるがえって国内移動を見ると、沖縄本島在住者41名中宇西銘の出身者が多く見られるが、そのことよりも、41名中16名が警察官、17名が教員で、職業に大きな偏りが見られる点が特徴的である。この傾向は、数は少なくとも、八重山の場合(3名中1名が教員)、本土の場合(14名中3名が教員)にも見られ、久米島在島者の場合(78名中35名が教員)にも明らかである。(第6表)

戦前においては、教員ならびに警察官は、官僚ならびに職業軍人とともに知的ならびに権力的代表者であり、社会的地位の高いものと評価されいた。この村の場合職業軍人は皆無であるのが特徴的であるが、教員と警察官の多いことは特記できる。特に、久米島→沖縄本島→本土、あるいは→八重山、また外地向けに→台湾、樺太という空間的ネットワークで考えると、この村の人が持つ社会的上昇指向性が、ここに空間的に表現されると考えることもできよう。海外(外国)移住者の場合、これらと同じ水準の社会的活動として名簿に記載されているということは、当時の社会的(村内における)評価としては、海外移住は、単なる空間的移動というこ

第6表 具志川尋常高等小学校卒業者中の教員・警察官数（昭和7年）

渡航先 字	台 湾	樺 太	沖 縄 本 島	八 重 山	本 土	在 島	内 教 員	内 警 察 官	活 動 者 数 合 計
仲村	—	—	—	—	—	2	2	—	31
具志川	—	—	—	—	—	1	1	—	19
仲地	1	—	7	1	1	9	14	5	38
山里	—	—	2	—	1	4	4	3	21
西銘	2	1	16	—	1	8	22	6	61
兼城	1	—	5	—	—	6	7	5	19
大田	—	—	1	—	—	5	6	—	20
上江洲	2	—	—	—	—	—	—	2	7
鳥島	3	—	—	—	—	—	—	3	21
大原	—	—	—	—	—	—	—	—	13
北原	—	—	—	—	—	—	—	—	1
内教員	1	1	15	1	3	35	56		
内警察官	8	—	16	—	—	—		24	
合計	12	1	41	3	14	78			251

資料：『具志川尋常高等小学校50周年記念誌』昭和9年発行

とではなく、村内役職、教員、警察官と同じく社会的地位上昇行為として考えられていたことを示していると考えることができよう。

5. むすび

以上のことから次のことが明らかになった。

- ① 出移民の時代的経緯は、前回の調査で推定されたことであるが、今回全村に調査対象を広げてみても、同じ傾向が見られた。つまり、明治末期から大正前期の出移住者は第一期のグループとすることができ、それは村内上層者の出身者が主体であった。大正後期から昭和初期の出移住者を第二期のグループとすると、それは大部分第一期の出移住者の呼寄せであることが明らかになった。
- ② その両者を含めて、共に出稼ぎ型移民である。それは戦前において、

その大部分が帰村ないし帰国している事実からも明らかである。それと同時に、長男出稼ぎ型の移住が特徴的に見られる。

- ③ 出移民の地域的傾向を見ると、前調査で対象にした仲村渠・具志川・仲地・山里に加えて、それに隣接する西銘・上江洲からの出移民が多い。これらは地域的に見ると、内陸の山地に位置する「上（アギ）」の部落である。その中でも、前の4部落からはペルーへ、後の2部落からはブラジルおよびハワイへ向った者が多いという傾向が見られる。海岸に近い兼城・大田・烏島・大原等からはハワイ・中南米移住は全くないか、また、あっても極めて少ない。その中で、特に烏島は、久米島の「むら」に他から明治期に新たに移住し、参入してきた人達の社会であり、かつ主要な生業は漁業であるという事情もあって、移住は、専ら南方の漁業およびそれに関連した加工業を指向していた。その他の部落の中で、大田からは、全く別個にアルゼンチンへの移住者を出しているが、それは、「上（アギ）」の部落と直接関係を持たない。
- ④ 以上のことは、「上（アギ）」の部落においては、移住に際しての人間関係で、もっぱら親族関係に依拠していることを物語っている。同時に、海岸の部落の大原の場合は、この部落が旧西銘に属し、構成員の一部が西銘と関わりを持っていたことによって説明できる。
- ⑤ 大岳小学校およびチンペーへの在外者による寄付行為は、その動機および経緯を見ると、一つには移住の出稼ぎ性が、そして、それと同時に、外地にあっても「むら」の構成員の一部であるという意識が強く働いていることが読取れる。寄付に当たってもその点を強く示せるような配慮がされたことを伺い知ることができる。例えば、チンペーへの寄進に当たっては、烏居建設費と指定していることなどに見られる。
- ⑥ 戦前における移住者、ないし移住という行為に対する村の評価は、社会的価値づけとして、高いものであった。
- ⑦ しかし、現在、戦前の海外移住に対して、全体としての村の雰囲気は、無関心を装っているように見える。初め、役場に移住関係資料がなくなかったばかりでなく、移住経験者の数は極めて少ないといわれていたにもかかわらず、外来者である私が調べていく中で、徐々に、移住経験者の数が増えてきた。かつての海外移住の経験や記憶は、現在の日常の中では、「隠れたもの」となっている。それは、どうしてなのであろうか。日本経済の発展が、そうさせていると考えることは、極めて常識的

な判断であるが、他にも何等かの理由が存在するのかもしれない。それとともに、かつて、この村としては決して少なくない海外移住者を送り出していることからすれば、そのことが、この村の社会に何らかの意識の上での影響を与えているはずである。この点については、いまのところ問題として残されている。この問題は、「島」の「むら」の閉鎖性ないし開放性の問題と関わる今後の問題として残っている。

本調査に当っては、沖縄県庁、仲里村および具志川村役場、その他関係機関の方々には多くの適切な便宜を与えて下さるなど有難い協力を受け、大変お世話になった。また、インタビューに際しては、現地の村の人々の暖かい協力を得た。特に、順不同ながら、宮里清光、上江洲均、仲村昌尚、仲村静枝、久手堅太郎、上江洲智俊、祖根政輝、山川重清、喜納英三、仲村景勝、天久栄光、天久栄貞、吉里智研、仲村昌全、山里ハツ等の方々の名前を記し、厚く御礼申し上げたい。

(この調査報告作成に当っては、その調査費用の一部に昭和59年度法政大学特別研究助成金の助成を受けた。)